

農び路

西暦2035年、日本、人口はこの20年間に1千万人減少し、1億1千万人強、今後20年で人口はさらに減少し1億人を下回るとされている。この20年で労働人口も比例して少なくなり、サービス業よりも農業・工業などの利益効率的な生産業の就労者は減少し、食・物ともども自給率は低下していた。また国や自治体はこの減り続ける人口に比例しないインフラ、つまり剰余インフラの維持・管理に頭を悩ましていた。

そして地球規模で起きている資源・エネルギー問題は、エネルギー資源小国・日本では特に議論が繰り返され、新しい取り組みが今なお歴史的に国・自治体に求められている。

この季節都市も例外ではなく、2014年の51万人をピークには減り続けていた。状況は日本のどの街とも変わらない。しかし、中心市街地から1~2km離れた京町・花園町・菊水町、わずかに30haの閑静な三町においてこの新しい現状に耐える街づくりがおこなわれている。

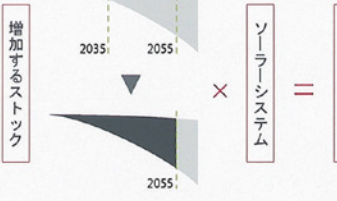
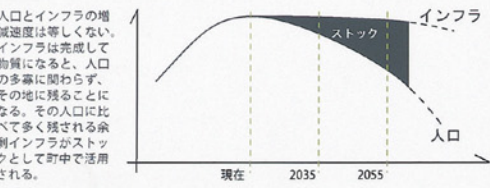
この三町は減少していく人口に反比例して増加していく空家や空地、果ては使用頻度が著しく減少した道路のような公共インフラまでを積極的に活用していった。剰余インフラを都市のストックと捉え、歯抜け状に取らばったストックを再び住民の生活空間へと転換しよとする試みである。

そこで活用に取り入れたのが、自然エネルギーと地域で獲れる農作物だった。人口減少により日本全体がコンパクトシティ・分散型社会に向っている現状の中、三町としてもエネルギーと食の地産地消化を考えたうえに状況であった。生活の糧となる食とエネルギーを中央からの供給だけに期待できる世の中ではなくていく。

過去20年、この取り組みのおかげで町内の様子は一変した。使用頻度の減少した路は太陽光を熱源に変化させる集熱器のアーケードへ、空家・空地は農作物を育てる温室へと変わり住民の心と体を温めてくれた。街は再び人の歩く空間になった。路を歩きながら、ある人は土や作物を愛で、ある人はそれを食し、ある人は冬の寒い日に暖をとる、ある人たちは集いの場としての。

太陽熱エネルギーに変えられた農作物の育成、収穫といった節目を目にする中で街中で暮らしに季節の変化を楽しませてもらえる。太陽熱エネルギーが単にエネルギー源としてではなく、住民生活を豊かにしてゆくためのエネルギーとなった。この農の路は今後将来にわたって伸び続けていく。街の人々の暮らしを温かみのあるものにするために、ずっと伸びていく。

剰余インフラが街をつくる



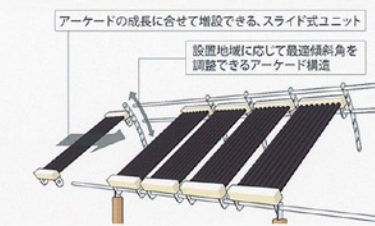
農び路の履歴



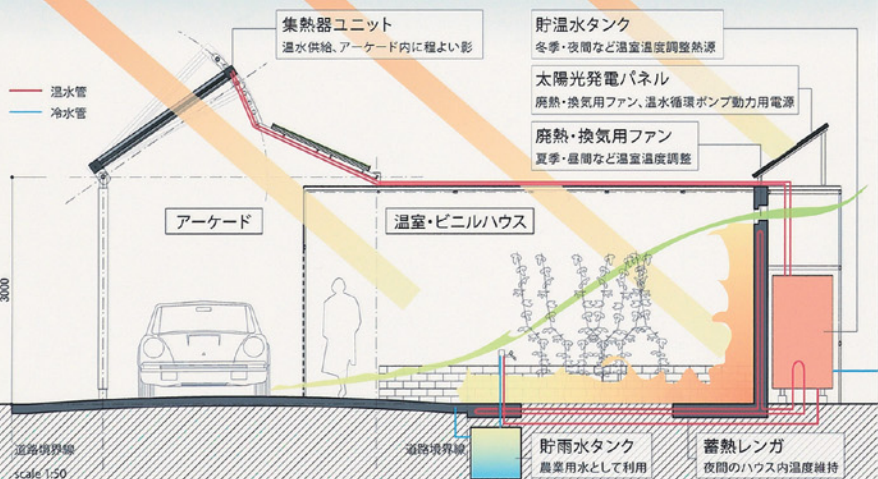
東西にのびる



変化に対応していく集熱器ユニット



断面・ソーラーシステム概要図



平面図

